

母親となった娘を支え続ける祖父母

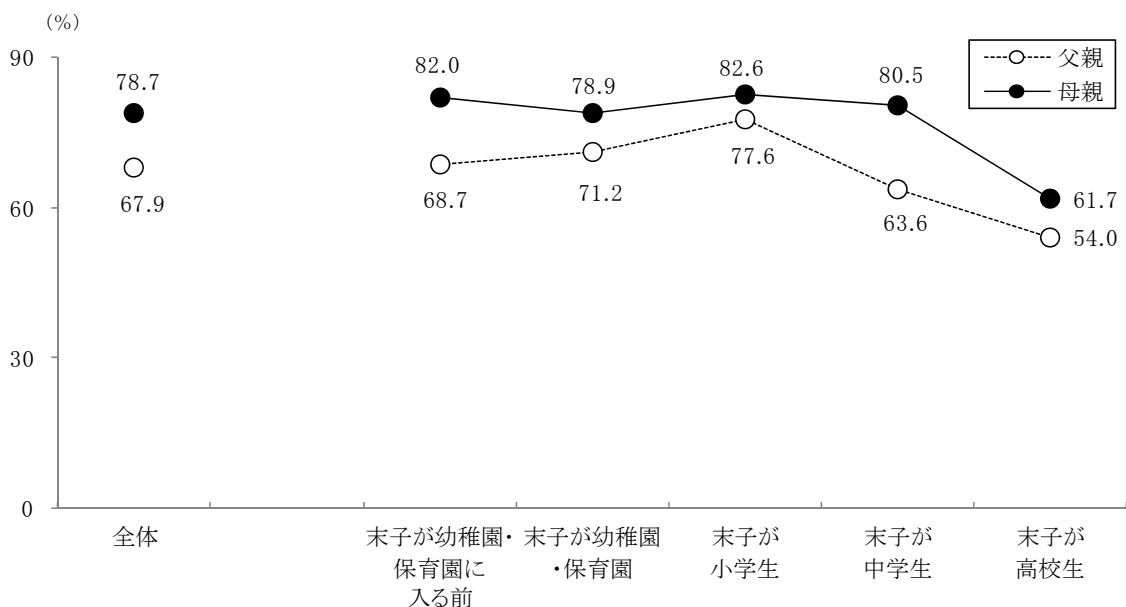
主任研究員 北村 安樹子

<「教育費」への高い不安>

子どもがいる世帯の家計において、子どもの教育費は、家族の生活設計全般にかかわる悩ましい費用の1つだ。早い時期から計画的な準備を心がけることができる費目ではあるが、学費に加えて習いごとなどの費用も考えると、ここまで用意すれば安心という明確な上限はない。そこが、悩ましさの源でもある。

当研究所の「ライフデザイン白書2015年」の調査で高校生以下の子どもがいる親に注目してみると、父親の67.9%、母親の78.7%が子どもの教育費に不安を感じている(図表1)。末子の学齢別にみた場合、末子が中学生までの母親では不安を感じている人が8割前後を占めており、父親に比べて「子どもの教育費」への不安が強いと考えられる。

図表1 「子どもの教育費」に不安を感じている(全体、親の性別・末子の学齢別)



注1：選択肢「非常に不安」「やや不安」「あまり不安ではない」「不安ではない」のうち、図表の数値は「非常に不安」と「やや不安」の合計

注2：高校生以下の子どもがいる人対象

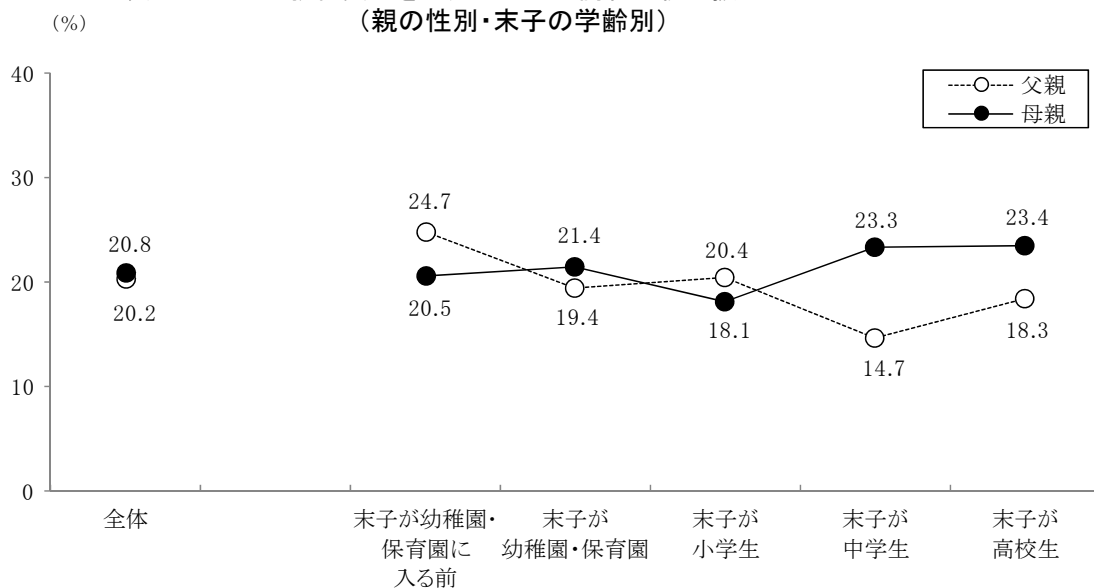
資料：第一生命経済研究所(2015)「今後の生活に関するアンケート調査」『ライフデザイン白書 2015年』(以下同じ)

＜教育資金の援助を祖父母に期待する親は約2割＞

近年では、祖父母から子や孫への教育資金等の生前贈与が注目されている。しかし、調査結果からみる限り、子どもの教育資金を自分や配偶者の親（祖父母）に援助してもらいたいと考えている人は少数派で、高校生以下の子どもがいる父親・母親の約2割にとどまっている（図表2）。

先にもみたように、子どもの教育費への不安は多くの親に共通する。頼れるものなら頼りたいのが本音であろうが、祖父母の現実の経済状況を考えてか、資金援助を期待しているとはっきり答える親は少ない。

図表2 子どもの教育資金を自分または配偶者の親に援助してもらいたい
(親の性別・末子の学齢別)



注1：選択肢「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」のうち、図表の数値は「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計

注2：高校生以下の子どもがいる人、かつ自分または配偶者の親がいる人対象

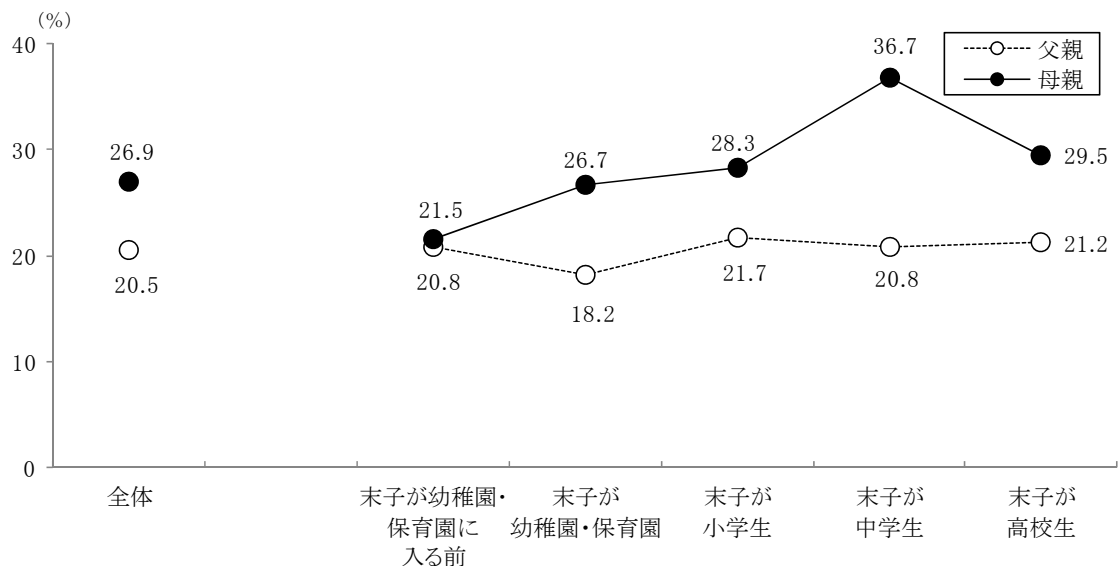
＜末子が中学生の母親の4割弱が、子どもの進路を祖父母に相談＞

一方、資金援助に限らず、孫の進路について自分または配偶者の親に相談することがあると答えた母親はもう少し多く、高校生以下の子どもがいる母親の26.9%を占める（図表3）。また、母親では父親（20.5%）に比べて、自分または配偶者の親に子どもの進路を相談する傾向が強い。

末子の学齢別にみると、「子どもの進路について、自分または配偶者の親に相談することがある」親の割合は、末子が中学生の母親でもっとも高く、36.7%に達している。なお、末子が中学生の父親では、相談することがあると答えた割合が20.8%にとどまり、母親より15ポイント以上低い水準となっている。教育費の資金繰りを含めて、子どもの進路選択は、誰かに気軽に相談するのは難しいデリケートな問題である。一

一般的に、父親に比べて結婚や出産以降も親とのコミュニケーションをとる機会が多いと考えられる母親では、親に相談することによってこの時期のさまざまな不安に対処しているのかもしれない。

図表3 子どもの進路について、自分または配偶者の親に相談することがある
(親の性別・末子の学齢別)



注：図表2と同じ

<聞き手としての祖父母>

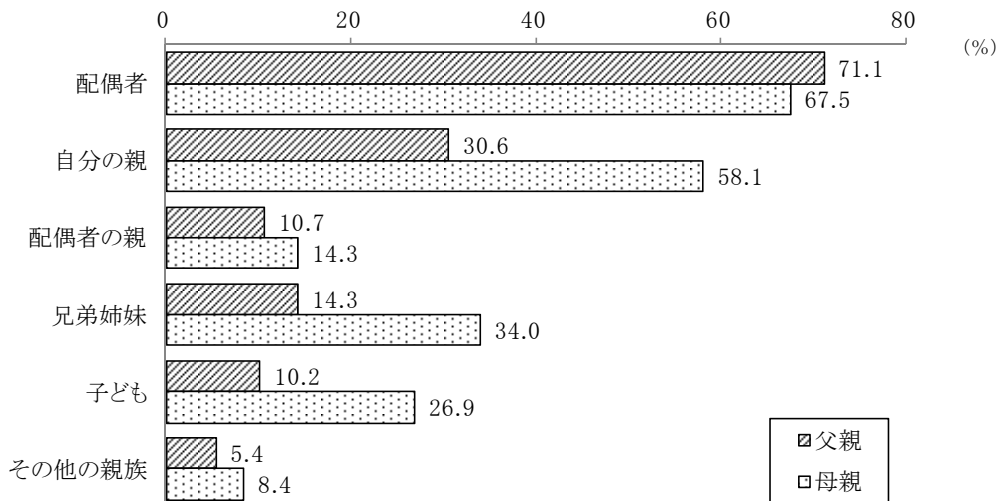
実は、母親にとって自分の親は、子どもの進路に限らず、心配ごとや悩みごとの聞き手として重要な存在でもある。

図表4は、高校生以下の子どもがいる親に「あなたの心配ごとや悩みごとを聞いてくれる人」を複数回答でたずねた結果である。家族・親族についての回答結果をみると、父親・母親の双方がもっとも多くあげているのは「配偶者」であり、父親では71.1%、母親では67.5%を占める。高校生以下の子どもがいる親にとって、自分の心配ごとや悩みごとを聞いてくれるもっとも良き相手は「配偶者」であることがわかる。

一方、「配偶者」に次いで多くあげられたのは、父親・母親とも「自分の親」となっている。ただし、母親が「自分の親」をあげた割合は58.1%であり、父親(30.6%)を25ポイント以上も上回っている。父親に比べて母親にとっての「自分の親」は、心配ごとや悩みごとを聞いてくれる相手として重要な存在であることがわかる。

末子の学齢別にみた場合も、すべての学齢において父親・母親の双方がもっとも多くあげているのは「配偶者」であり、「末子が幼稚園・保育園に入る前」の場合、「配偶者」をあげる人は父親で80.6%、母親で82.6%を占める(図表5)。ただし、母親の場合、末子が中学生までは「自分の親」をあげる人が半数を超え、末子が中学生の

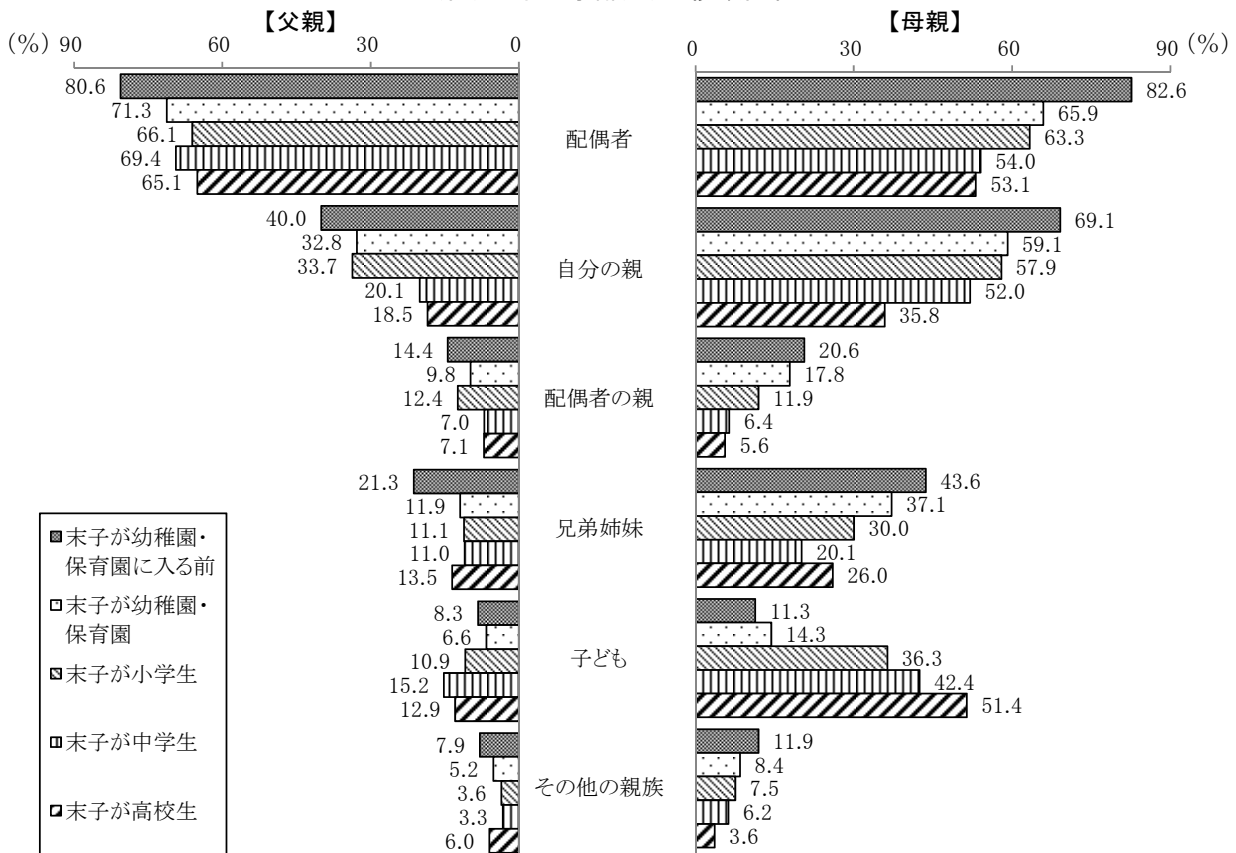
図表4 高校生以下の子どもがいる親にとって、「心配ごとや悩みごとを聞いてくれる」家族・親族 (親の性別) <複数回答>



注1：選択肢にはこれら以外に「地域や近所の人」「職場や仕事関係の人(元同僚を含む)」「学校・学生時代の友人(同窓生含む)」「趣味や習い事を通じての友人」「配偶者を通じての友人」「子どもを通じての友人」「その他の個人的友人」「誰もいない」がある。

注2：高校生以下の子どもがいる人対象

図表5 高校生以下の子どもがいる親にとって、「心配ごとや悩みごとを聞いてくれる」家族・親族 (性別・末子学齢別) <複数回答>



注：図表4と同じ

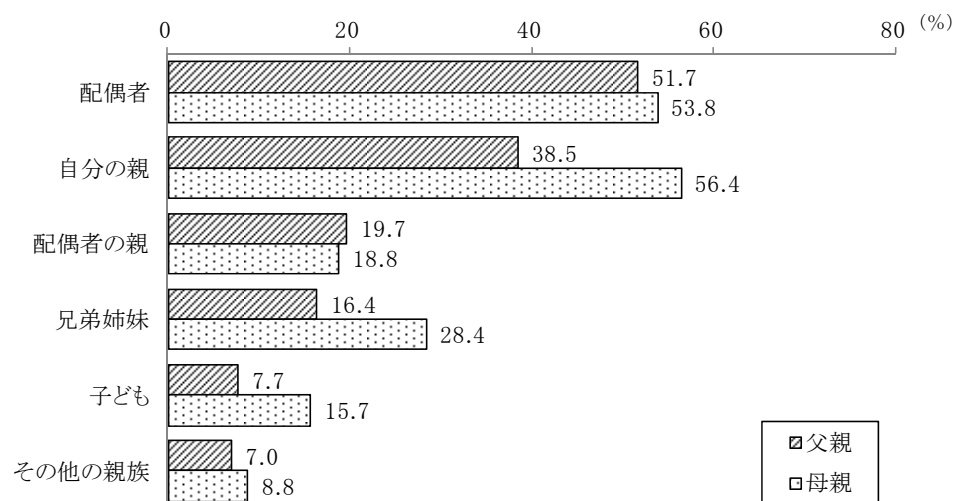
母親では「配偶者」（54.0%）とほぼ同じ水準の52.0%となっている。末子が中学生の時期は、母親の心配ごとや悩みごとの聞き手として「配偶者」に近い水準で「自分の親」が重要な存在になっていると考えられる。

＜助言者としての祖父母＞

また、母親にとって自分の親は、助言やアドバイスをしてくれる人としても重要な存在でもある。図表6は、高校生以下の子どもがいる親に「あなたに助言やアドバイスをしてくれる人」を複数回答でたずねた結果である。家族・親族についての回答結果を見ると、父親では「配偶者」をあげる人が51.7%ともっとも多くなっているが、母親では「自分の親」をあげる人（56.4%）が「配偶者」（53.8%）をわずかに上回っている。

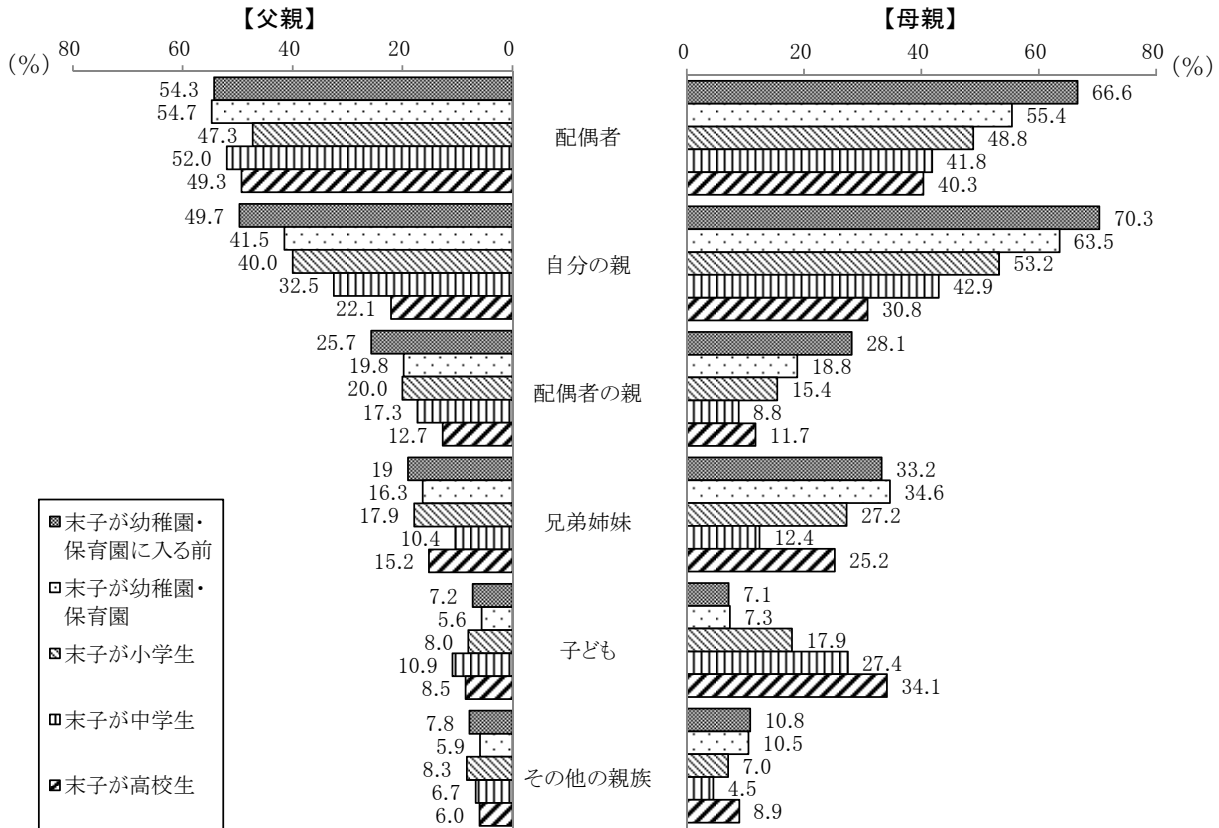
末子の学齢別にみた場合、末子が中学生以下の母親では、「自分の親」の回答割合が「配偶者」をわずかに上回っている（図表7）。末子が中学生までの時期の母親にとっての「自分の親」は、助言やアドバイスをしてくれる人として、「配偶者」と同じくらいか、それ以上に重要な存在になっていると考えられる。

図表6 高校生以下の子どもがいる親にとって、「助言やアドバイスをしてくれる」家族・親族（性別）＜複数回答＞



注：図表4に同じ

図表7 高校生以下の子どもがいる親にとって、「助言やアドバイスをしてくれる」家族・親族
(性別・末子学齢別) <複数回答>



注：図表4に同じ

<娘に寄り添い、支え続ける祖父母>

祖父母、親、孫の三世代関係における祖父母というと、孫が幼い間の育児の支援者や、孫の教育費の支援者としての役割が話題にのぼることが多い。一方で、今回の調査結果からは、特に孫の母親にとって、子どもの進路を含めた悩みや心配ごとの聞き役となったり、必要に応じて助言やアドバイスを与える自分の親、すなわち祖父母の姿が浮かび上がってくる。

幼い孫の育児に祖父母の支援を必要とする時期は限られている。また、教育費に不安を感じながらも、祖父母の支援を期待しているとはっきり言葉にできる親は少ない。しかしながら、母親となった娘をもつ祖父母の人生設計という観点からいえば、最年少の孫が中学生になる頃までは、悩みを打ち明けたり、助言を得る存在として、娘に必要とされる時期は続くようである。孫育ての支援が終わっても、進路選択や教育費といった悩ましい問題に向き合う娘の精神面でのサポートに、祖父母は備えておく必要があるのかもしれない。

(研究開発室 きたむら あきこ)